

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：27101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13306

研究課題名(和文)国民創設期インドネシア地方社会の暴力と離散をめぐる歴史人類学的研究

研究課題名(英文)A Historical-Anthropological Study on Violence and Dispersal of an Indonesian Regional Society

研究代表者

山口 裕子(山口裕子)(YAMAGUCHI, Hiroko)

北九州市立大学・文学部・教授

研究者番号：70645910

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文):1.インドネシア近現代史の分水嶺である1965年の「9月30日事件」と国内外情勢、およびその後全国に波及した共産党勢力の粛清を目的とする集団的暴力の実相を、東部の小地域社会ブトンに焦点化して探求した。当事者のライフヒストリーの探求からは、逮捕投獄、流刑地での過酷な開拓労働や、民主化後の名誉回復までの困難な道のりが具体的に明らかになった。2.過酷な経験とは裏腹に、当事者の語りには、ユーマア、時間の崩壊、自身の暴力の体験談の不在など、多様な特徴が看取された。その精査により、人間にとって過去を語ることの多様な意味とその発露の様態を民族誌的に明らかにし過去の暴力と記憶をめぐる議論を深化させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、1.インドネシア近現代史上、また冷戦期の国際関係探求上の最重要課題の一つである9月30日事件とその後の地方社会の動乱を、特に未開拓だった旧外島部のブトン社会に注目して解明した点にある。2.これを、現在の社会生活で人々が過去に関心を向け、語る方法と相互反照的に考察することで、人間にとって(暴力的な)過去およびそれを語ることの多様な意味を、それを聞き分析する者の複数の関り(連累)の可能性と併せて明らかにした。3.さらなる多面的な分析のために、聞き取った音声資料を原語で逐語的に書き起こし、概要と特徴について日本語のインデックスをつけた資料集を今年度中に刊行する準備が進んでいる。

研究成果の概要(英文):This study investigated the "September 30th Movement(G30S)" of 1965, which is considered as a watershed of Indonesia's modern history,and its domestic and international backgrounds.Focusing on a small regional society named Buton,it also explored the collective violence such as arrest,exile,and murder,which aimed at purging Communist powers and spread nationwide after the G30S, and the meaning of the past violent events in their present life.The life histories of the parties certainly tell their difficult lives suffered from violence and discrimination which lasted even after the restoration of honors in the post-Suharto Era. The narratives,however,also showed various aspects such as humor,the collapse of time,the absence of own experience of violence,etc.By scrutinizing those aspects,this study investigated the various meanings of the past violence and the modes of expressions, and elaborated the theories to approach to the past violence and memories from ethnographic perspectives.

研究分野：社会人類学

キーワード：集団的暴力 記憶と歴史 インドネシア ブトン社会 9月30日事件(G30S)

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

民主化と地方分権化が進む現代のインドネシアでは、国史の見直しや、これに呼応した地方文化や地方史の再考が隆盛している。最大の焦点となるのは、スカルノ初代大統領の失脚を決定づけた1965年のクーデター(未遂)である「9月30日事件(G30S)」と、その後全国に波及した共産党(PKI)勢力粛清を目的とする大量虐殺、逮捕、流刑などの集団的暴力である。事態を收拾し第二代大統領となったスハルトの長期権威主義体制下では(1966(68) - 1998) 事件とその後の集団的暴力について触れることは重大なタブーであった。ポスト・スハルト改革期に入って以降は、冷戦期の国際関係や、大量虐殺をめぐる被害者と加害者の証言など、多方面から事件に迫る仕事が国内外で数多く生み出されている。他方で国家の周縁部の地方社会に光を当てた研究は依然相対的に乏しく、またこの集団的暴力が50年余りの年月を経て、今日の市井の人々の生に占める位置ないし意義については、十分な考察がなされてきたとは言い難かった。

いっぽう人類学や歴史学では、西洋近代的な主体としての旧来の人間観からの脱却を志向する大きな流れの中で、異質な制度や身体、自然などの流動的な編成に注目する「脱人間中心主義」や、主体の意思に完全には制御されない「記憶の受動性、創発性」の議論が隆盛している[ノラ(編)2002; 太田2008; 富山(編)2006など]。本研究は、これらの理論的潮流から刺激を得ながら、それを日常生活で人々が過去の出来事に関心を向け語るといふ、広義の「歴史語り」に実践的に援用し、人知を超えた記憶と想起の様態や喚起力を考察する。

2. 研究の目的

本研究は、1965年の「9月30日事件」とその後の共産党勢力粛清に揺れた1960年代以降のインドネシアの地方社会の動態とその今日的意味を探究することを目的とする。暴力と離散の経験をめぐる当事者らの語りと、冷戦期の国際関係、国内の諸勢力間関係、および現代の民主化動向など複数の時空間文脈を相互参照させた複眼的視点から探究する。

ここでは、過去の出来事に関する一貫性を欠いた語りの特徴や、過去が現在において語り表現される契機やカタルシスに注目し、記憶の受動性、スティグマや暴力をめぐる人類学および隣接諸分野の諸議論を援用して分析した。対象となる東南スラウェシ州のブトン社会は、海上交易の要衝として17世紀のスルタン国時代に最盛期を迎えるが、現在では自然資源や産業に乏しい、政治経済的周辺社会である。9月30日事件後の1960年代末には、多数の地方エリート知識人が共産主義勢力との関与の嫌疑で逮捕、拷問、島外への流刑などを経験した。この暴力的な過去はしかし、今日ではほとんど話題に上ることはなく、語られるとしても、常にトラウマティックで悲劇的な過去として斉一的な物語に回収されるわけではない。暴力の経験談からは程遠い、ユーモアや、家族との心温まるエピソード、また奇跡談などが反復して長時間語られることもある。そこで本研究では、「被害者」と「加害者」が小さなコミュニティに共存する社会生活において、多層的な歴史的記憶の中から、当該の過去の一連の出来事の記憶が現前する瞬間や、その語りのもつ暴力の経験談からは零れ落ちるような多様な特徴に光を当て分析した。それにより、過去の集団的暴力の実相と、現在においてそれを語ることの多元的な意味を、周辺の地方社会の視点から明らかにした。それとともに、語りの実証性やアイデンティティの政治には還元できない、過去が現在に回帰して人々に語らせるような、脱人間中心的な歴史への人類学的接近法の構築を目指した。

3. 研究の方法

本研究は、主としてインドネシアでの実地調査と同国および日本での資料収集に基づく文献研究によって遂行した。

- (1)実地調査：各年度にインドネシアにて実施し、ブトン地域からの離散者と関係者へのライフストーリーの聞き取りと、ジャカルタおよび地方社会での文献資料の収集を行った。
- (2)文献研究：インドネシア国立図書館、地方議会、および日本の諸機関にて、東西冷戦期のインドネシアの国際関係と反共動向、事件後の被害者の名誉回復運動で用いられた行政文書などを収集し解析した。また特に近年インドネシアで一般向けに多数刊行されている9月30日事件関連の書籍にも広く目配りし、言説間の比較検討を行った。
- (3)成果の公開と方法論の陶冶：各種学会、共同研究会(国立民族学博物館など)に参加し、議論をとおして歴史と記憶をめぐる方法論の陶冶を図った。成果は随時研究論文や学会の口頭発表などで公開した。

4. 研究成果

本研究の成果は主に以下の4つに整理できる。

- (1)インドネシア近現代史と地方史の探求：改革期の2000年代以降のインドネシア内外では、9月30日事件とその後の集団的暴力について豊富に成果が刊行、再版されている。そのうち事件とその国内外の背景については、[Anderson and Mcvey 2009; Roosa 2006; Taufik et al. (eds.) 2012; Asvi 2015; 倉沢 2002, 2014, 2016]などの先行研究を渉猟して捕捉した。そこからは、a. 20世紀初頭以降の民族主義運動期からインドネシア国内では共産主義と反共産主義の分裂が継続していたこと、b. 独立後の農村における農地改革が、地主と貧農の間の軋轢を生み、この階級的対立がさらに、ムスリム間や容共/反共の緊張関係につながっていったこと、また同時期にはc. 西イリアンやマレーシア対決など国内外で不安定要因を抱えており、d. イ

インドネシアの共産化を警戒するアメリカは、独立以前の主権委譲時からインドネシア政治に介入していたことなど複雑な背景が捕捉された。

(2) 9月30日事件後の集団的暴力の解明：9月30日事件後の集団的暴力についての業績のうち[Sulistyo 2000; ローサ(他編) 2009; Sukanta (ed.) 2014]やオープンハイマーの映像作品(2012, 2014)などを検討し、地方での暴力の実相を捕捉し、以下の通り東南スラウェシの事例を相対化しながら考察した。

(3) 東南スラウェシ地方の近現代史と集団的暴力およびその今日的意味：当該地域の行政文書などの一次資料と、元政治囚らが2000年代に地元の文芸運動(後述)を通して著した集団的暴力に関する記述[Saidi 1999, 2000a, 2000bなど]を分析するとともに、逮捕、投獄、流刑などの経験者やその家族など関係者への半構造化インタビューにより探求した。そこからは、以下のことが見て取れている。

a. プトン地域での「赤狩り」が本格化するのは国内の他所よりもやや遅い1960年代末である。プトン人県知事Kをはじめ多数の地元の政治家や知識人が逮捕投獄され、拷問により落命したり、解放後も社会的差別を受けるなどした。1969年以降、地方政治の要職は末端の村落に至るまで、隣接する南スラウェシ州出身の軍人によって占められ、プトン人県知事Kが生前創設に尽力した2つの高等教育機関も廃止になり、農村での儀礼の禁止など文化の統制も行われた。このように軍が軍事と政治の方法に介入する「二重機能」は、同時期のインドネシアで全国的にみられた事態であった。

b. 今日のプトン人はこの一連の動向を、9月30日事件をPKIの仕業に帰したスハルト期の呼び名である「G30S/PKI」を参照しながら「プトンの要人がG30S/PKIへの関与の嫌疑で逮捕され、プトンの政治と文化が南スラウェシ出身者によって骨抜きにされた事件」と語る。同事件の背景として、王国時代以来の南スラウェシ地域との歴史的怨嗟やプトン社会内部での階層間の軋轢にも言及される。一連の出来事は、今日地元では、「69年プトン事件」と名付けられ、2000年代初頭に民主化を背景に隆盛した地元の文化を掘り起こし記録する文芸運動でもその顛末について取り上げられるなど、今日では地域内で一定程度定式化した「集合的記憶」が形成されつつある。このように、69年事件は今日のプトン社会の周辺化を決定づけた出来事として地元では認識されており、よりマクロのG30S/PKIを参照することでプトンをその全国的な出来事の一端に位置づけて、忘却の淵から救い出すことが希求されている。

c. さらにプトン島から遠い流刑地に現在も暮らすプトン人元政治囚への聞き取りからは、1965年12月ごろからプトン人知識人らの逮捕が始まり、A村へは1979年にかけて段階的に入植、開拓が行われたことなどが明らかになった。このように、現在地方の集合的記憶として形成されつつある「69年プトン事件」のアウトラインでは補足できない出来事の多面性と、重層的に忘却されている人々や出来事の内容も明らかになった。またA村の元政治囚は、自らの経験を「〇〇事件」のように集合的に名づけることも、その意味をメタレベルで語ることもなく、個人の経験として語るという特徴が看取された。

(4) 歴史記憶をめぐる議論と(複数の)方法論の陶冶：以上のように資料から読み取れる特徴の多様性に鑑み、アプローチ方法を多元化させることで分析し、全体を通して方法論の陶冶に努めた。

a. 集団的暴力が語られる多様なモメントと一貫性を欠いたナラティブへの接近： 暴力的な過去は、調査者とのインタビューを主な契機の一つとして想起され語られる。それ以外にも、儀礼の実践や、地域創生運動で掘り起こされる地方史に埋め込まれ、それらの合間や、時系列を飛び越えてプトン王国時代の諸勢力関係などの遠い過去の出来事群と同列に語られたりすることもある。同時代の状況や経験は、常に悲劇として斉一的に語られるわけではなく、ユーモアや笑い、一見荒唐無稽で非合理的な奇跡談が散見されることもある。また複数回のインタビューを通して、同一人物の語りには有意な変化や、また決して語られない話題があることも見て取れている。これらの諸特徴については、文化人類学やオーラル・ヒストリー研究の成果を参考に考察した。そこからは、語り手を「暴力の被害者」などの一元的なアイデンティティから解放し、尊厳を回復させる側面や、語り意味づけを与えることで出来事を制御し、テロス(決着)をもたらすなど、様々な時代状況において苦難に際した人間の様態にも共通する特徴が析出された。ごく近年では、プトン社会外部で刊行された資料に、69年プトン事件に言及したものもある[Hadi 2017]。その情報は、地元の言説と食い違う場合も、逆にそれを補強する場合もある。事件に関する経験者とそれ以外の外部社会で生み出される言説は、相互に参照され書き込まれる状況にあり、その意味で出来事の実験者や非実験者の違いは絶対的で架橋不可能なものではない。以上のように語りは、しばしば一貫性を欠き、語る主体によって完全には制御されない側面をもつ。これについては、歴史を人間に従属させ、前者を後者の構築物ととらえる旧来の歴史学を超越しようとする、近年の諸議論「富山 2006; 太田 2006など」を参照して考察し、「記憶の不随意性」や人知を超えて現在に回帰する歴史の喚起力などを析出した。

b. 語りや過去の出来事以外について伝えるものへの接近法については、人間と過去が切り結びうる多様な関係性をめぐる「過去の連累(インプリケーション)」の議論を援用した[モーリス＝スズキ 2013, 2014]。それによると、歴史研究は出来事の因果関係を考究する「解釈としての歴史」と、ある過去の出来事を想像したり共感したりする「一体としての歴史」の双方が必要であり、特に後者では唯一の「歴史の真実」の探求ではなく、「歴史への真摯さ」の追求が肝要となる。これは方法論というよりは、人間が歴史に向かう際に持ちうる心構えというべきものである。

が、歴史への真摯さの追求は、歴史的出来事とそれを記録し表象する者、表象されたものを見たり聞いたり読んだりする者との一連の関係性の連続からなるという指摘は重要である。それは唯一の史実の確定とはまた別の、複数の暫定的な結論を導く不断の営為となり、おそらく歴史への真摯さの追求においては、人間の多様で複雑な歴史実践を分析する唯一の万能な方法論を導き出すことよりも、あらゆる形態で歴史にかかわる(連累する)人々のその多様な連累のあり様を、他の事例と比較しつつそれぞれに丹念に解きほぐしていくような作業が必要となるだろう。そして史実の探求と歴史への真摯さの追求は排他的ではなく、相互に補完しながらなされる必要がある。

以上の暫定的な結論を踏まえ、本研究をとおして記録収集したのべ 80 余名分の音声資料は、1960 年代の集団的暴力と、それ以外の、人々の生にまつわる豊かな情報を含み、当事者はもとより、今後それを聞く者も含む多様な人間の参画の下で、地方の近現代史の再構築とそれを超えたより多角的な分析に開かれたものであることが有意義であると考え。以上を鑑み、本研究では、遡って 2011 年以降の関連するインタビュー資料を、インドネシア人助手の助力を得ながらすべて現地語で逐語的に書き起こした。資料の一部については、上述のとおりすでに分析の結果を論文や口頭発表の形で公開している。現在では、この資料を登場人物のプライバシーに配慮した形で修正し、概要と特徴に関する日本語のインデックスを付けて第三者にも開かれた資料集として段階的に公開していく準備を進めている。

< 引用文献 >

- Abdullah, T. et al. (eds.) 2012 *Malam Bencana 1965 dalam belitan krisis nasional*(1965 年の国家危機のもつれの中の災いの夜). Yayasan Pustaka Obor Indonesia.
- Anderson, B. and R. Mcvey 2009 *A Preliminary Analysis of the October 1, 1965, coup in Indonesia*. First Equinox Edition. Singapore: Equinox Publishing.
- Asvi, W. A. 2015 “Fifty Years Study of G30S: Perkembangan dan Kecenderungan(展開と傾向)” (早稲田大学 9・30 研究会 2015 年 1 月 17 日配布資料)
- Hadi, K. 2017 *Kronik '65: Catatan Hari per hari peristiwa G30S sebelum hingga setelahnya*(1963-1971) (1965 年のクロニクル:9 月 30 日事件前後(1963-1971)の日々の出来事の記録), media Presindo.
- Halbwachs, M. 1992 *On Collective Memory*. Edited and Translated by Lewis A. Coser. Chicago: University of Chicago Press.
- 倉沢愛子 2002 「インドネシアの 9・30 事件と住民虐殺」『三田学会雑誌』94(4):81-100。
——— 2014 『9・30 世界を震撼させた日: インドネシア政変の真相と波紋』岩波書店。
——— 2016 「9・30 事件と日本」『アジア太平洋討究』26:7-36。
- モーリス = スズキ 2013 『批判的想像力のために: グローバル化時代の日本』(伊藤茂訳)平凡社。
——— 2014 『過去は死なない: メディア・記憶・歴史』(田代素子訳)岩波書店。
- ノラ、P. (編) 2002 『記憶の場: フランス国民意識の文化 = 社会史』(谷川稔訳)岩波書店。
- 太田好信 2008 『亡霊としての歴史: 痕跡と驚きから文化人類学を考える』人文書院。
- Roosa, J. 2006 *Pretext for Mass Murder: The September 30th Movement and Suharto's Coup d'etat in Indonesia*. Madison: University of Wisconsin Press.
- ローサ、J. (他編) 2009 『インドネシア 9・30 事件と民衆の記憶』(亀山恵理子訳)、明石書店。
- Saidi, M. 1999 “Buton hersih dari Fitnah Basis G30S/PKI (ブトンに対する G30S/PKI の汚名をそそぐ)” *Wolio Molagi* 5: 21-14.
——— 2000a “Kronologi Tragedi Buton 1969 (ブトン 1969 年の悲劇のクロノロジー)” *Wolio Molagi* 6: 29-31.
——— 2000b “Kronologi Tragedi Buton 1969 (Bagian II) (ブトン 1969 年の悲劇のクロノロジー 第二部)” *Wolio Molagi* 7: 33-36.
- Sukanta, P. O. (ed.) 2014 *Breaking the Silence: Survivors Speak about 1965-66 violence in Indonesia*. Monash University Publishing.
- Sulistyo, H. 2000 *Palu Arit di Lading Tebu: Sejarah Pembantaian Massal yang Terlupakan*(1965-66).(甘蔗畑のハンマーと鎌: 忘れられた大量虐殺の歴史) Kepustakaan Popular Gramedia.
- 富山一郎(編) 2006 『記憶が語りはじめる(歴史の描き方・3)』東京大学出版会。

< 映像作品 >

- オープンハイマー、J. 2012 『アクト・オブ・キリング』(イギリス、デンマーク、ノルウェー合作) 166 分。
——— 2014 『ルック・オブ・サイレンス』(デンマーク・フィンランド・インドネシア・ノルウェー・イギリス合作) 103 分。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山口裕子	4. 巻 43
2. 論文標題 過去との多様な連累の探求に向けて：インドネシア地方社会の集団的暴力をめぐる考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会人類学年報	6. 最初と最後の頁 23, 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口裕子	4. 巻 24
2. 論文標題 集団的暴力が語られる時：1960年代末以降の東南スラウェシでの経験から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 インドネシア言語と文化	6. 最初と最後の頁 87, 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口裕子	4. 巻 25
2. 論文標題 1960年代末の東南スラウェシ地方の集団的暴力：多様な経験の語りに注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 インドネシア言語と文化	6. 最初と最後の頁 59, 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 国家英雄制度の誕生と展開
3. 学会等名 東南アジア学会第95回研究大会(分科会8「インドネシア『国家英雄』認定に見る国民統合、地方と民族の現在」)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 海域世界とブトンの歴史
3. 学会等名 アジア農村研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 集団的暴力が語られるとき：1960年代末以降の東南スラウェシでの経験から
3. 学会等名 日本インドネシア学会第28回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 生きている過去：草創期インドネシア地方社会の集団的暴力の語りと現在
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 1960年代末の東南スラウェシ地方の集団的暴力の経験：語りの遷移と不変性に注目して
3. 学会等名 第49回日本インドネシア学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 生きている過去と身体：1960年代以降のインドネシア地方社会における集団的暴力へのアプローチ
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」（代表・風間計博）発表
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山口裕子、金子正徳、津田浩司（共編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 木犀社	5. 総ページ数 332 (7-50, 51-102, 318-321)
3. 書名 「国家英雄」が映すインドネシア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----